里見八犬傳 第四編 卷之二

へ13
709
17

門 逸 18
號 709
卷 17

無總里見八犬傳第四輯巻之二

東都　曲亭主人編次

第三十三回

小文吾夜麻衣を喪ふ
現八郎遠く良藥を求む

信乃見八丈五兵衛ホ与今蘆原なる人ホ名ども呼ばれく。二人齊一目を
あつ。のふせまゝと躊躇程ホその人水際ゑ下拉く。艇く艦ホ進ミ近つ見抱ゑる
袱包を左のゑ之取ゑ廣ゑ。頻かむりせゝゑ拭を解ゑ額の汗を拭ふく艦ホゆど
掛るをと見ゑ見別人ゑ。ど大田小文五ゑ名れば文五兵衛ハ呆ゑ果て腹ゑ
しげホ声ゑ。ゆり立ゑ不覚ゑり白物ガ祭祀の神酒ホ醉ゑ名場所も沼ゑど
戯言ゑく。可惜膽を潰ゑたゑ。然ゑも和郎ハ義も理も忘ゑてゑ。この人ゑの仇ゑなる。
底意ある故ホ。ゑゑ口走ゑゑける欲ゑ敦圉ゑくいひ懲せば見八ハ後方ゑ。袂ゑ掖て

推禁め翁さのそを腹くそめそ他人ゐ竊聞せくるゑ俺們ゐ生死存亡再びこゐ知るべくもと言長けるゑ洩易しそ戒諷諫の誠心ゐんと和解く艦ゐ進を出大田生悪るえや苦楽良歓幸不幸ひとゐゐ長物語を初くゐもたゑ俺れ欲辺死るくまゐ立在ゐ。其知ゐ左りとゐ告ぐ躱ゐ故くそあら免風縁盡えど不慮の再會ゐ。ぐえ甦生ハみゐ大人の恩恵ゐくそとひゐて遠く信乃を見えゐ。ゐハ小文吾ゐゆと引あゐをゑ進を辺ゐ死大哥ゐるゑ渡りゐ某ハ犬塚信乃戌孝と呼くめ尊大人の物語ゐく過世ゐるべ死由を知ゑゑ初對面とゐりそえも現因もゐく縁ゐくハゐそゐ大人ゐ邂逅くく再び生るとをゑゑ死況和殿ゐ遭べ穴雲妻時ゐくとゐこの船ゐ乗ゐく相潭ゐ乗ゐくと請勧ゐ立もゐゐそ某漫ゐ声を耳奥ゐ乗ゐる高声話説ハ老ゐ親の癖と知ゐくも胸苦くゐゐ。

いのくのそ義も理もうち忘ゐく。刀祢ゐゐの仇ゐゐる底意ゐゐ有繋ゐ親の言ゐゐゐゐ強顔ゆと唱ゐ膝摩擦く裙ゐ著く蚊をうち拂ハ信乃見ハそゐくそと共侶ゐ慰めく其辺ゐハ蚊もあり裳も濡ゑ陝くたこの船ゐ。このゐを小文吾ゐゐ否刀祢ゐゐゐ置ゐ死某實ゐ中戻くく迎ん為ゐ来ゐくゐり。家ゐるの大人よゐ。ゐゐ郷ゐ某神假殿ゐゐ還てんれハ大人ハ在せど婢児們ハ不楽しけゐ又釣ゐくく出ゐハ早ゐハ還りゐゐ。とのゐ壁訴訟ゐゐゐ堪ゐ彼ゐそけゐの走百病を日来待くゐひくんゐ今更ゐゐそ留守ゐくゐをゑハ憂ゐくハ例の釣場ハくく知ゐ。いでやゐゑいゐそく彼ゐゐる若んと思ゐくゐゐ索ゐゐ立盡くゐ蘆原の蘆の間ゐゐ遥ゐ又ゑハ大人ゐ目熟ぬ舟ゐ乗ゐ外視もゐゐど壮佼とうち相潭ひゐゐんゐゐわハと猜ん。力ゐくハゐも立ど彼れゐく近つ辺く。竊ゐを程ゐ又一人身を起ゐゐあり。

是則見ハぬくしのやうく此彼の戸難奇遇彼玉のゐ。痣のゐ。孝心義膽異聞珍
説縡の顛末をうち宵くふいと怪しくも幸ある哉「五」も亦その人こと過世ある
べきを知る歡び譬るふものをかし。とく出く對面せまくとゐひつ又ゐかう。
婢児們を出しやうく彼人こを伴ひ。よろのふ影護ゐべし。宿呵ふ還りく物ゐく整へ
復ふ来く仰るこれふ對面ゐるこも遲うゐと胸ふ揣アく宿呵ふ退れ婢児們
ふハ身の暇を取らく出し遣ふ。暮かる日の便りよけまゐ門を鎖く背門より
出再びふふ来く又まゐ。ふ言果ぬ大人の長譚某がう人物こしけふ。説誇ゐふ
こうハ傷痛くれと意中を告まゐ丈五兵衛ハ笑ひ冗ゐ頭を擠汝ハ年ゐ
ゐけまこも。親ゐハまく思慮深ゐ。こも知らざまゐ驚さま腹ちく〻ふゐぬ
ゐまく叱ゐハ親の役ぞよ。誘賓客を伴ん先ふ走アく案内成せゐといひ
あゐ立んとゐるを小丈吾雫時と推禁めゐや黄昏ふゐりこまこも市中へ祇

園會ふ往返ふ人も門毎ふ掛し燈籠もヨヌゐるふ犬飼ぬの打吟の異ゐるを見ハバ
怪むべし加以犬塚ぬの衣も袴も血ふ染ゐ。あれらのゐをゐめをめて短長不便
の物ゐるべけまこど単衣をのく来まゐ。ふ脱えさせまゐまこといひつ件の袱包を
艦の板ふうち乗く推轉ゐく解披けば内ゐりしく西口の刀さ又見まゐ。當下
二ゐんご。ふの小丈吾ハ信乃と見ハふうち對ひこの榛搨の單衣も二田山木綿でゆべ虐さゐ
あゐゐべけまこど二彦ちのく脱更の衣の間ふ布の列衣も二條狩三條あり布の
中ぬハ貝ゐふ龍ゐる膏藥もふ。そハ相撲ゐるもの搨瘡ふも撲傷ふも用ひく
效あるものゐまゐ各位金瘡ふゐく打さゐ。その布をゐく巻ゐ就中犬塚ぬ。も腰の
間輕けえこの西刀ハいぬゐ比。ある人ゐう購得ゐま。西刀帯ゐまゐ。ねどもこゐ
價の廉かゐ。ふ銘ちまこども燒刃の匂ひ鋭刀ゐるべくゐひしゐべ漫欲さふ買
とゐく親ゆいく叱らまゐ。ぬ當坐だゐも帯のべ幸ゐくんと真ゐ。件の

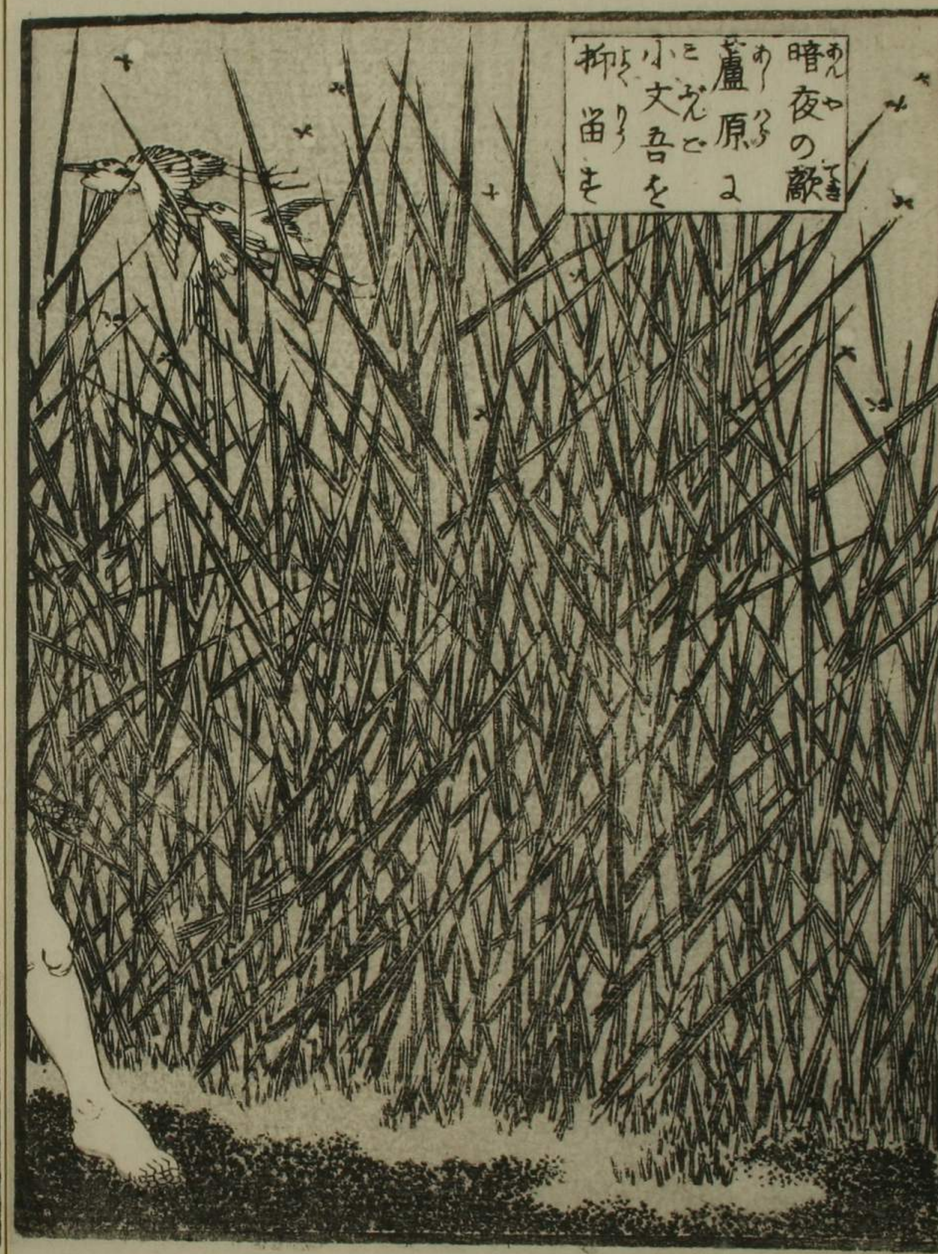
両刀を贈るゆゑ信乃は進寄て跪きて恭しく受納め。鄕ゆは某許我の御所に。不意ゆ歃を受しゝば刀を取るゆ暇なく。耳に挂て透を窺ひ先め進みし一人の刀を奪ふて戦ひつゝ。竟ゆ折れたれば身ゆ寸鐵を帯びず。輙く更る衣のゝ。かくまで心代用のられし。賜めは千金なり。和殿の侠氣と勇力は翁の物語ゆ詳なれば。只その義勇のゝ。才幹遠慮も。ゝ見ゆ兄なり。ゝゝ真の同胞なるゝも有ゝかゝ。恩義ゆ。そと大ゝ。ゝぬ秋ゆ見ハも亦小文吾が。緯倉卒の間ゆて。飽まぐ心を盡ゝる恵を謝しく信乃と共ゆ身を。衣を脱更て送ゆ扶てその浅疾を布ゆて巻々結ぶ程ゆ丈五兵衛は。ゝ子の才覚誉ら。ゝく足る親なり。秋ゆ面ゆ見れく。信乃見ハが脱捨る衣も袴も肱稍臑稍も。ゝゝゆ圍く袱ゆ推包て端引結べば小文吾四下を見ゝく。大人も賓客達を誘引くゝ還る。

某ハこの私を推流しく後より退ゝん袱包ハそぶまゆく釣竿をのく立る人。物ゝ忘るゝゆ。と心をつくるゝ点頭つ信乃見ハを見ゝく誘ゝる人。龍口ゝ。先へ退出ん。ゝ礼へ許さゝ人と舷ゝ踏かゝる親の足を濡さゝじゝく。そぶまゝゆ腰を抱げゝ小文吾よゆゝさゝゝも。放せくとゝゆ程ゆ扶て水際に立ゝゝゝ信乃見ハは後方より。内ゝと水際ゆを立てゝゝゝ大哥いゝゝゝく翁共侶ゆ宿所で俟ん現ゝいの私を遺し措ハ彼草隱ゝゝ野鶏の尾を顕ゝゆ似ゝゝ。左右に和殿を労ゝるのゝ心ゝゝゝゆゝゝ小文吾ゆ。ゝゝゝ

刀を背へ推纏ふ。彼纏を解捨て。船ゑ措る祇包をそぐまく取て楚と背負ひ底滴ゑ乾る私の港板ゑ肩さ〻へまく推と程ゑ脛を越さまぐ何中へ推ゆく出し引向て力ゑ乗しく突放せば船を後さまゑ揺め死走まて大洋のうへそ出ふける。小文吾今はゆろ易し。と云てさがちつ。徐かゑ舊の水際ゑ還てのぞりて。濡せし足を拭ひけるまはの時てや日ハ暮果て。甲夜間ゆるゑいてしく蘆の巣左右ゑ生茂まく。黒白も判ねど心あてゑ石の上ゑ脱きえゝる。草履を拯まく。足ゑ引穿。蹇揚ゆる袖を伸しくゆ拭をのく塵ゆち拂ひ。熟く迷ぬ如法夜ゑ家路成さしく。悠と立ゆらんとゆる程ゑ一反ばゆ遣過て。蘆原の邊よゆ。紺と縹と経緯ゑ織做ゆる。巨縞の浴衣と皂死唐織乃帯を幅廣ゑ締びゆる。隻褄高く裾端折しく。一口の腰刀と跨へ藍絞ゆるゆ拭ゆく頬被せし一個の癖者忽然とあらはれ出てつくと透し見ゆる。彌歩ゆる小

文吾が後方ゑ跟く。掻拂くゆ。瑞を下と握て留く。西三歩引戻せば此も驚ぐ。身を反り。揺一揺。振拂ふく見ゆ。ゆる肩尖を押く。礙と衝背けそのまを。閃りとうち掛く。小文吾が背負ふゆる祇包の真中。個で引倒さんと。手ゑ。包を一布引綻しゆ内ゆ。ゆる麻衣のあやゆる烏夜ゑ小文吾ハとも知ぬ。ゆく焦燥。身をゆり回し。跳蒐く。癖者が右の腕。拉んと。楚と。食ゆ。ゆられて怯まぬ。振放ち抗る。巻の早蕨と。薄ゑ受ゆ。煉の働死。撲べ論ず。推ぬ。外も。迭ゑ。ゆ。ゆる巻法の奥妙。顔も認ぬ。足下も。進退不便の滅達。打踢。散す。小石ゑ乗し掛く。双方齊一踏に。彼ハ。ゆる。ゆ。此ハ。ゆる。ゆ。遣錯しく。幾歩。踏地。ゆ。ゆく走まく。輾んゆく立留て。迭ゑ且く。透し見ゆる。寛定めつ。癖者ハ。ゆも。打んと。進む。双拭衝と。突出。小文吾が。巻と。進む。郤合ゆく。癖者ハ。腕肚と。大く。撲しく。霎時。ゆる。堪ぬ。一声。苦と。叫びゆる。一間。ゆ。遠巡しく。

小文吾


暗夜の敵
蘆原より
小文吾を
抑り留む

尻居ゐ撞と倒まてる音を使けども目ゆへんぬ小丈吾ハ紙包の寛を固く引結直しく歩早ゐ脱まく宿呼ゑ還まけり。少選しく癖者ハ還まゐ復身を起し再び追んと踏出まも足ゐ蹋掛る麻衣をゐだやく取て拊く見ろ。烏夜ゐ翳しく透し見ろ。ぞもと領ゐ莞尓とうち笑を衣推圍めて懐夾めくゐを組頭を傾け。思按も路次も引えく塩濱のかゑ走去ぬかゑて程ゐ丈五兵衛ハ信乃見ハを伴ゆく橋麓の宿呼ゐ還まつ。躭く背門より進入く。彼此ゐ灯を点し奥おやまろ子舎ゐ件の二人を安措しくゐまつる酒食を安排しゐと叮嚀ゐ勧くゐのゆう。暑熱ハ毎年のまるまどもこの六月ハ毎ゆゆも雨ふることの間遠ゐまゑ。旅ゐる人の勝ぞやありんこてらゐ宿借るゐ稀ありさゐれ嚮ゐ噂せし。彼簾倉ある大先達念王坊とゐ修験者のそその従者を いゐ返しくゐゐ宿ゐ只ひとり。ゐ尼逗留ちまどもそまもう濱邊ゐ赴

くく神輿洗を持んしく。亭牛の比より出ちゐ今宵ハ其処ゐ止宿しく翌ゐ出ゐ
かゑまゑ来ゐとゐまゑれゐて。もう。婢児們のみる在ぐ。ゐろゐ不自由ゐるゐ
ども家の内ゐ他人を置ねゐかゐるゐ後ゐ出ゐるゐ物のいひこゑ折こゑ嘗嗚しく、
召見老人を労ゐろしく人氣をのゑ包ゐゐゐと正首ゐ慰まゐ信乃見ハハ把ける
箸を遽しく折敷ゐ置く茶しくゐ勝ゐ掛老人のゐ。ゐろゐ。ゐ叮
嚀ゐ饗応せゐる。厚意謝まゐゐ餘まあり。縱親戚朋友ゐ凡凋落ゐ
及ゐ。ゐ久ゐ。況咎ある人のゐ。縁坐の出ゐを怕まゐ。誰ゐ一夕も宿まゐ
凡人の親ゐるゐ。ゐ子の友のゐゐ揣ゐゐ義をゐく後難を憚ざる翁のゐゐハ
ゐゐ泡ゐ。ゐれゐまく翁をゐゐ日を累く倘連係ゐまとゐゐ後悔其処ゐ
立ゐまゐ。ゐ郎のゐ。ゐ欺ゐ述恩ゐ謝し。今宵一夕晤言明しく翌ハ未
明ゐ発足まゐ。と齊一辞ゐを使めゐ。ゐ何ゐをいゐ。ゐん市人ゐ正

ゐるも亦武士の妻の腹ゝ空し。拙郎も俱ふ義を結ぶ各佐と兄弟あらべ。
子と孰か異なるべき只いのまぐも。さくふをうせよ。こゝもかくもゝて舎藏ざらんやこゝ
ゝや著を抗めと他支ゐく勧めり慰めり飲を盛そえるぐゝ。数待態の浅
ゝねべ。信乃見八ハ感佩ゝく。豪傑の子ハるのゐ。その親も亦かくの如ゝ。こゝ。但
人のゝ人ゐゝぐ皆吾们が半ひそふふ憑ゝ限ふそと俱ふ嘆賞ゐさりけり。饗
膳も稍果る比小丈吾ハかゝり来ゐ。ゐひゐゐゐく癖者ふ抑留せゝゐゐく挑ゝ時袱
包綻びゝ。信乃が麻衣を遺せゝども。遠ゝゐ折ゐふ烏夜ゐり乞れば心もつゐぐ
さゐゐ彼癖者ハ人の懐ふゐをかゝる。小倫児の類ゐゝゝ。繆のゐゐを按ゐゐふ彼奴ハ
蘆原ゐ躱ひゝ。私の中ゐ密談を竊ゐせゝのゐ狡ゐゝゐゐゐゐ恨ゐて。
閣愛ふせゝゐふ彼れふ埋伏せゝ。ゐ狡何ふゐゐゐ彼條の密談ゐ外ゐ洩ゐ。
ゐゐ賓客の仇ゐゐゐゐゐゐ安ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ色ふ見さゐ背負ゝ包

の所結を解却ゝく措収戸棚へそゐゐく納めゝく戸を引閉躰ゝく子舎ふ赴けべ。
信乃見八ゐ狡び迎へゝく。席を譲ゝ圓居ゝつ。ゐゐく厚ゐ父子の恩義を謝
ゐゐ言の巣濃ゐゐゐゐ。小丈吾これを伺ゐゐ彼ゐ丈ゐ二彦ゐ意ゐゐふゐ。ゐゐゐゐ
のゐ紙恩ゐゐく。謝せゐゐゐゐゐゐ

又今ゆらのるゆふかぶ[illegible]。燈燭ふさ[illegible]。うちゐんく齊二感嘆をかく
ちのく玉をゐろちく舊の如くふ取納ゑゑ。丈五兵衛ハ軟しげふ小文吾ふうち對ひ玉
のるゆハ曩ふいひるゐぶ偽ざる浅諦せゐを緯の序ふ汝が痣を二彦ゐゐんせゐ
いふ小文吾ゆくうち微笑ゑ某が痣を所ゐろうゐんせよゐゐんハ亟礼をん
ども親の言ハ背ゑくゐ。許一ゆゑとのひうけく帶引解く衣を退け。背向ふゐゐて
元ゑゐそ。丈五兵衛ハ行燈の灯口を其方ふ向ゐうける。當下信乃見ハ目を斜
ふくこ亘をゐんゐふ肥膏づゑる肌膚の白ゑハ雪をも欺くべ。背ふ灸の迹も
ゐく。殿肉ふ黒ゑ痣ゐを。現その形牡丹ふ似ゐ。両人只顧稱賛ゐく。脱ゐ單衣を
うち被ゐ亘ゑ小文吾ゆく袖をゐ屋ゐて。ゐんむゐく帶を結びゐ。信乃ハこれをゐんゐく。
昔異朝周の時晉の獻公の公子重耳ハ國を追ゐ流浪ゐく曹國を過りけゐ。
曹共公ゐ。絡ハ重耳ハ駢ゐ脅のゐゐと伺ゐく。竊ふこれをゐんまく欲ゐその臣釐負羈

諫ゐども聽ゐず。重耳が浴ゐるゐゐふ闕窺ゐ。淮南子ふハ曹君頻ふ重耳の駢脇をゐんまく
重耳覚くこれを恨ゐ。重耳が國ふ返り位ゐ即ふ及ゐ遂ふ兵を起ゐく曹を伐
共公を虜ふゐ。件の辱ふ報ゐんとゐふ重耳ハ晉の文公ゐ亘ゐり。國語史記ふ
載ゐ亘ハ書を讀ゐんハゐるゐとゐゐ。犬田生ハこれと異ハ年来相撲をゐゐ
ゐつ。肌膚を見ゐとも嫌ひゐく。ゐんゐども。その丸ゐくこれの所をゐんせゐる莫迦の
交ゐゐハ慢侮の咎めゐゐハ。ゐんゐふ痣ハ見ゐり。といひつく偏祖ゐく示せば小文
吾ハ痣を丸くまゐく。奇ゐと稱ゐ。當下信乃ハ祖を斂ゐ。ゐんゐも歎息ゐ只ハいの
三友のゐゐど。彼犬川荘助義任假名額藏と呼ゐ。ゐ。痣も玉も亦相ゐふ
この圓坐ふ彼一人を剛ゐゐて送憾ゐ亘。彼額藏の荘助ゐ人と形りハ如此ゐん
箇様ゐと説示ゐ。この玉のゐゐ。痣のゐゐ因果何ふの所以を知ゐねと曩ふゐゐ母
の送愛ゐゐ与四郎と名づけゐ犬の亡骸を庚ゐる梅樹の下ふ瘞ゐふその梅明

年実を結びて八房ふ生さ子り。その梅子ふ文字顕れ仁義礼智孝悌忠信の八个字定りゆゑ讀まるいとも不思議のるゝまでに採りてその実を藏めぬ。その核を今あるゆゑ文字ハ乾る皮肉と共ふ失て迹なくなりしかどその核ハ圓くしていと微小なる各秘藏の玉ふ似たり。初彼梅の八房ふ子もろ成見出せしハ某と荘助のみ當時両人ふ問ひるかう。ハの梅ふ頭まて文字ハさてもう形さへよく吾ふ子ふ似たるに王を秘藏するゆゑ外ふも亦あるべき筈ふ必ずまでなるよ異姓の兄弟なるべしと思ひしに毫差ぬ。今又こふ犬飼犬田の両死友を得て四人ふなるまでハの外ふもまたあらべ久後いよ〳〵憑しからん筋ひ八ハ是ふおゐてと言細ふ説示せば丈五兵衛ハ膝を進め耳を側て驚嘆し日ハ小文吾も又ゆゑふ奇異の懐をせざるを得ず過世の契を感悟して額藏の荘助を いと慕しく思ひ。かくて見ハ傷ふあるべけ盃を改めて信乃ふ丈吾ふ勧めしべ。

両人称ひて義を結び楽を共ふせんも憂を與ふ。同日ふ生れぬ同日ふ死まべしと誓ふ丈五兵衛も亦称ひて肴を増し盃を勧るふ信乃見ハ毛刀瘡あるべ只盃を受て酒を喫まず。公羽ハ又まてらぬ命の親ゝ又令郎小文吾と異姓の兄弟さうゝハ義ふ於いて亦親ゝ兄盃を賜るべしと請ふて称ひ成盡きめゝ丈五兵衛ハ不材ふ羞て。いよ〳〵信乃ふを敬ひて當下小文吾も父ふ對して某聊ふ言ふ旨あり。ゆゑ〳〵までゆゑ〳〵某在宿せざる日ハ是ふ心弐用ひる人昨今止宿の旅人ハ多くまでも彼修験者念王坊翌ハ必ず来べ。只彼人のそもゝ〳〵いぬる日ハ幡の相撲ふ房ハ〳〵く恨て妹夫ところ放さべ殃危其外より發られ狂ふまも亦知るべからず某世上の人氣を考へて僧侶とあらべこの二彦を他所へ移さんそも機ふ臨て変ふ応じくせんとべ思ふれども。ろゝ沼の為まゝ〳〵のとゆゑハ甲夜ふ蘆原ふて走て蒐まし癖者のとふ

かくもろふかまさるまでとは知らず孫ども。文五兵衛は寔ふ然ありと心けて。見八とれをうち嘗く。現この処を領しる。千葉は嶮我殿の郎方なり。且横堀在村は。その精忌充逞し。渠見八は恙なく。犬塚生と義を結びく。逐電せしと伝へ聞く。犬塚主より某を。尼僧むと甚しかりし人の視聽を避るゆへ名を更るふ。犬塚主より某を。尼僧むと甚しかりし人の視聽を避るゆへ名を更るふ。

あり。さて見八の見の字は養父の字の隻字なるふ。擯弁ん。さて口は犬の玉なる故ふ。さるに実父のうへを知るか。まば見の字に玉を加へ。りあるる現八と唱へんとのふ。相譚へば信乃小文五は見八がかる時ふも親を忘れぬ孝心を感佩しく。さるべと応しば見八は今宵なる。現八郎と改め信乃も見く假字を告て人の耳目を避ふけるまはのとは夜はもや深く子の半更鈍と。ぐ死ふ頻に門を敲くあり。小文吾は戸口ふ。ものたく。呼門は誰そと問ふ。その人ものく。声をぬり立巳は塩濱の鹹四郎なり。神輿洗のかるまふ濱辺ぐ壮者共が大く鬨詩をあるふ

よりも怪我せ。あも亦ヨヌ。そぐ中央。ちの相撲の弟子もあり又市川なる。山林房は弟子もあり。甲夜なる甲乙截判しく双方を和解をども敵なる。他所のあれなるべ小夜のを深く事届ぐ関取のあるくとも。かくも扱ふく。

あるねう。数計のあれも待てをるとくとのそぐせは小文五口ゆて舌うち鳴ら。折も折とく奴原が仇鬨詩をあるゆ。そるまは親仁が暑ふ中られ。婢児ども走百病しく人隊なるべ出るく。恒まはあらぬとあるぐら。神輿の供奉ふ立ぐるまるは。敵なは市川人まく山林が弟子なるべ伴のつるらぬ貌もあるくまど汝を先へとく走と追續くるまゆん人騒しの奴原なるとのふ残鹹四は笑ふ。然ぐば関取俟くをう。さく朱まを期を推く足音高く走去る。小文吾はそぐまく小又子舎ふ赴るく二彦を礼をつるまるぬ大人よ。今門邊まく云云とのひるるの濱辺のあく癖ふく高声なるべ伴のえつん。

毎年の祇園會ハ出ぬるゆゑに某ら甲夜よりも籠をりさるハ今ゆゑずも疑ふん短夜のゆめあまべ明もべ還りかくるべし。大人ハ賓客達を臥さしく戸鎖しく寢まりぬとのふ丈五兵衛を伴めあくまで眉根をよせ頭を傾け。壯者ハが醉狂ふく打ち擲とももろとも。敵ハ市川人ゆく快ふぬ房八が弟子ゆべ彼如ゆる物ごゆしく枝ハ殖さねん人の喧嘩を買ふゆよ。とのべ小丈吾微咲く。そハもろ沿て行ゆる貝腹立さる房八が横ハ車を推ゆとも直ゆる道を直ハゆく某を何ともゆべ死とハふをべ聽ゆく懷紙をさゆくと引裂ゆ一條長く一條短く褚絆しく左ゆハ取り。小丈吾ハ和郎がもでの了簡と彼がへ、ひとく氣の立ゆ死の了簡とも知ゆで。和郎が十六歳のとき桃權の犬太を結果し。その折ハ誓言立て人と爭ふとも人を打ゆ大刀を帶るとも刀を拔ゆとのひゆ後ハ物諍ひをせゆとゆけ此度の確執ハ私のゆゑ。その腋刀を且ハこせとのゆゑ取て膝ハ横又仕の紙索を鍔の透と鋒ハ引融しく楚と結びく傷ハ措ハ小丈吾が右のゆゑ胸前近く引きく又紙索ゆく右の巨指季指の本ゑ紋結しく餘れる端を引れハ小丈吾ハ呆果く彼ゆゑ問せも果ゆ丈五兵衛も腋刀の鞘を握て膝ハ立親の私を子ハ知ゆゑ紙索ハ脆きゆゑとも結びく刀を留ゆ引ゆ抜くとゆゑ國の法度も又親の教訓もこの紙索ゆゑ破ゆんと思ハ破ハいとも易けゆゑ破ゆべ非法不孝し大刀ハ則男子の精神身を護る德ゆゑ人を砂ハ死為ゆ佩ゆ兩ゆハ則使役の至宝萬事を辨ゆる德ゆゑ人を打ハ死物ゆハ縱ゆゑ腹立しく忍びく死ゆハ堪忍び親ハ歎死をともハの紙索の絶易く絶ハ再び結びくて。とハひゆしく堪忍び親ハ歎死を被ゆゑと生平ゆハ義理深ハ庭訓ハ小丈吾ハ忝くて応も沿せゆ頭ハ

低く居さるもけの信見現八まさの是我件のごとくに八ざも嘆賞し通微妙の教うる。
心とのふ字八鎖の似さり。心の心の鎖をさせば是則忍び忍び死をよく忍べば恨もなく
悔もなく幸あるべく雙あるべし親あるべしと誰うかまぐ雋く諭さば死身を護る
神も佛も親のまとめあべしや吾們既の二親なり。是第一の不幸なりかる
教をゆくのつけてもいと美しくゆといつまでも小文吾頭を攫短慮八功を成さず。
とロゆいいくど一旦の怒のその身を喪ふあると箴らまし親の恩胸の的膽の徹さり。
こゞ大人まさろ我安へ多某既の三四個の雋傑の下の列る過世あるけんよりと
覚まべこの身八千金萬金へいつでも一旦の怒の乗しく親を忘れ友の員くの
徳をあるべ忘べ倘この紙索を断とあべ親まへ勘當せらるべく人このも乗
らべし。さでハ俠者といつても要なし。其を忘れる為の被し紙索の指環も
圓く治る喧嘩の和談夜いまや深くゆべ某も罷まる寝まるまへといひけく

一刀取く跨めば。丈五兵衛頭ひさ安堵さる挑灯をのてあるべとのひ
立を推とめ。廿日あまりの月魄の隈る死夜へ却の挑燈八頓し天明て戻り
の遅くとも。ひ過し我をのふるといそしく親を慰めく。信乃現八の辞し別れ
まや外面の立ぬまへ両人も共侶の身を起しく戸口の目送る丈五兵衛八
ぬる迹の樞戸を鎖しく扨盃盤をとる納め子舎の帰を垂まく信乃現八を
休せそのまを納戸の退ひく睡んとまる程の丑三の鐘鍾鍾とまぐ寝ぬ
枕の響ひ。却説その詰旦丈五兵衛八とく起く火を焼水を汲る早膳を
調理く信乃現八ぶ起ぬ我侯程の日八いと高く昇りまへ巳の比の高くれ
ども小文吾八いまぐ還らぬ件の両客八。まぐ覚ぬ大くるぬ疲労ゆ
熟睡まるまへといへべそぐまくしく。要時てそあるけ是今八覚てもう死比
まへと子舎の間ある障子の開るまの立ちまへ。日の

蘭くゆゑと高き小呼起せば現八は遽しく。幡より出く障子を推開。某は曉方より。
とく覚てゆへども。いつゝ小せん犬塚生は未明より。金瘡甚しく腫疼て其苦脳も
亦甚し。痍へ牽ゝ灸所を外まく浅ゝ。されば躯く愈んと思ひつるゝ俄頃ゝ
腫疼るゝ。ゝ終日河風ゝ吹暴されゝるゆゑ。破傷風ゝ為るゝ。某さまくゝ
心を盡しく看病んと欲すれども。腰著の薬龍もゝ。よまてゝ。翁ゝ告て
相譚ずやと思ひ。ゝ代りもゝ老人の朝の炊ゝ。ゝを呼立んもゝ
ゝ翁ゝく醫師ゝ。ゝ診るともせん術ゝ。且も孫ゝと犬塚ゝの
いつゝゝ小黙止ゝとゝゝ小丈五兵衛ゝ。ゝ駿ゝ。ゝ。ゝ。

久しく止まず特に死んとせしるに死年少死男女の鮮血各五合をとりて合してその瘡に洗へば疼痛止み腫退けるその瘡ハ立地に愈癒力も一日にして本復せり。

譬へ幕をもて塵を拂ふ如しとの某弱冠の比亡兄が口傳なれば家の口碑に遺されあ近属小文吾に伝授せり。されども鮮血五合を採るべ採るべ人を必死ハ

うもその人死なずとのふとも銭あり威勢あるものの虎分のみぞと問へば現ハ沈吟して血洗の方善といへども醫療ハ故ら仁術

なるに人を害ふて薬剤を求めんは不仁の術なり忍びざる死所行なるべし

某が武藝の師なり。古人二階松氏の筆記に軍陣薬餌の條あり。

なる方あり。されども某ハ肯へて因て試ることもの。但武蔵なる志婆浦に破傷風の賣薬あり。その効験の良剤なり。某少年なり。時同藩の某甲が中田の戦に深痍を負ふて破傷風にかかりけり。醫療その效なし。志婆

なる薬を試ることく立地に愈しるあり。志婆へ五里あり。六里のやあるべ

ふん今より四日水死比に只顧に路次を急ぐ今宵四更ばかり。薬店

の名ハ忘れたれど某彼処へ赴くべ素當ざるとあらんと潜め死告げうち点頭

現その薬をうべ。さるほどに月も金瘡あり。炎暑を犯し遠く走りて忽ち

もとも人の知るこあるまく途に事に悔るとそ及ばず已濱邊に

走り出るに小文吾を召し渠を志婆へ遣はしとも某が赴くとも左も右もとも

けるとのひたすら立んとせる現ハ急に推禁め哥々今まぐかりとなるべ

脱れて死よ。あるべきにいたるまでハ出るべ。山豆今まで彼処にあらんや

さる程翁を足を労しく彼処に赴くとも徒に時の移り

輙鮒の窮を救へ。某ハ微瘡の道中ハ笠あく潜ん途にまく支あるとも進

退もづく自由ならず。人とのひあるべきを振て足を踏立て示すぞ文五兵衛ハ

義に勇む志を感じて禁めむもいなび早飯をとゝめあゝぐ。路費藥料を贈る
しぶ現八は漸に髪を搔梳て膳に對ひ遽しく箸を飲めてすでに立出んとする
程に文五兵衛は飯行李に笠に脚絆に草鞋まで送もあくまで揃て遽なる
現八受とりて某ぞ〳〵あるべき信乃よ辭別をせざるえ今云云の謗あるべ
志渡へ赴くこゝを告べ辭ずして必禁るべきゆゑなれば。
その病苦を增のみせんか後に犬塚の亘理紙なるとあるべ翁云云と告てこゝと密
語ぐゝ緣頰に尻うちみてく草鞋の紐ゆまちぐゝく結びつゝ刀を取て腰に跨
文五兵衛に辭別て笠深隱とうち載て背門より潛び出けり。

第二十四回

栞崎に房八宿恨を霽す
藁塚に犬田急難を緩す

文五兵衛は現八を背門のほとゝに目送て内に入るゝ出ゝゆゑ。その人の
る知れるを當惑る信乃が病著ゝ出せまし。かくやせまし。と思ひ煩ひて体
ゝ胸を身を暇なく小鍋に炊く白粥の烹沸れば日に日にそゝ
せぬ風藥素湯に勝れと貯藏のまゝに煎る藥罐量る茶碗の水如減
一盃半日に居て粥と湯液を勧ゝ信乃も食氣あるゝとく箸も沼
とゝ藥も飲まゝ現八が枕邊に久しうよゝぬを訝まく何処へゆきし
問に文五兵衛は憑あくまで云云と報ゝ信乃は仮のく嘆息。彼人も
金瘡あり俱に人目を忘れが分の漫に遠く出あるゝ繹にあるべゝ金
湯と湧く盛暑の真中に老る人を労らく使まゝ四月に死ぬ
ゝ死ぬ者てけまゝ獨悔ゝ抱ゝ四月に温塞をゝ沼堪ず枕邊
ゝ後邊に立選て勸る老の母に夏の日に熱も漸
頃に未の下刻ゝ文五兵衛は干ゝと汗に帶布の衣を絞あゝ

上風を入れて外面に退れ出肩ぬぎ袒を背負ふ如く拭ひつ
胸のあたりを引かく敷る袖の片ぬひあるを待つ間小六吾八今まで何
をかたぞ壯者八木遥なる齡と共に氣の長さよと獨言して門傷へ空
とる折から足音高く来るあり。それ欺とこれ見ぞそれ見めあらじ。走奴と
唱らく莊官の使なり。店前より誘音うけく古那屋の檀那をなる欺莊官厥
より火急の要用とて早く来まれと呼ぶ丈五兵衛ハ折ふし騒ぐ
足ぬ事なく謀くれ人のぞある莊官厥の召状でも知らるべく婢児ハ例の
仕くきのあるを走白病にて一人もをらず拙郎ハ濱の閑詩截判昨夕
久
おぐ還らず孤ぞ留守なれば絶えなり且く遲ぬ糸をまくりして給とのいせも果ぞ
眼を睜て留守ハあるともあらじとも思ふ後ろとなりんや宿所ハをたづねる
こと方と素なく今ハなくまよとのまれ誘共伯ハいれまのせと只管ないそぐ。

樞ハ尻をすくなり。丈五兵衛ハいとゞ安ぬ胸裏ハ莊官よりと見なる彼の
ちんぬ欺。このヨ欺とうひもく沈吟して。ちんまハ猶豫ちゝ雲時まちね今
ゆんとのひみく身を起て奥を見せでと出居の障子の開閉せらく信
臥る子舎ハ却ち。扨云云と密語ク莊官の宿所へハまくよりて半里許ぬや
あらんとくゆたく疾久ぬ日を消とこれあらじ。そゞ程まハ小文吾も必ずまを来
つたふ。煎薬も素湯も枕辺なる。埋火ふみくあり。物ぞ不自由なるけと
ぬ且くをとをせとのハ信乃ハ枕を敲く仰ぐ眉をうち顰め物の不便ハ
感ハ足なども村の長なる呂ハ一日ぬるハ
命死のまぬく惜むぬ現ハ今ぬ
難義ハ及ぶともあぬ腹の死切く死んのまの首捕く連係の辜と脱れ
とのハを丈五兵衛ハ忍ぬるのぬよ村ハ居く莊官ハ呂ハ所ぬ

已ハ客店のうちなれども毎月ハ二度も三度も旅人の名簿を糺さるゝけれもそこらの筋なきもの濱の聞諍の発汁あらんよりもく扨ぞふ緩放ふ保養志夏と辞せらるゝ慰めく又外面ハ立岩。自漆復の絹羽織畳一領を左ゆふ把り右ゆまい竹の皮鞋を縁ゝ誘ゆへと下立ハ走奴ハ眠げふ目を擦く欠伸しく脱を捺り先ハ立ち外ハ出ぶ丈五兵衛ハ店前ゆ簾二枚縦ゆ一餘ゆる端ハ戸を引せくうちつ是拉く荘官の宿所を投くいそ多りさら程ハ大田小文吾ハその夜さ塩濱ハ到充て聞諍の為体を問究め躯て市川ある山林房八許人を遣しく和睦の義を相諾せるふその人かゝり来く房八ハ宿所ハ立ぞ由ぞうるうもあるぞとのふあるろ且双方を和解ゝ次の日又市川八人を遣しなけれども房八竟ハ来ざるもふ和睦ハ後日のゆゆく傷けらるゝ市川八を徒輿ハ乗せゆるとの里人鞭傳ゝ送ゝ遣しゆどを所役ハ廿

三日を仇ハ消しく下晡ハ来ふけり。小文吾ハ親の俟らん賓客達ハのゆゆん。と云ふゆ且くも留ゆ之絶ねゆかゝ扱ひ果ゝと中ぐく里人ハ辞一別ゝく家路を さゝく分り茅崎と字さ一並松原を過ゆ折忽地後ハ人あゝて犬田等と呼み云ゝ小文吾呼ゝく凡久ゝゆ是則別人ゆゆゆ山林房八ゝ越の縮の麻衣ハ萌ゆるゆろ多ハ緋の縮面の犢鼻褌の前巾を透さ付く銀の銃輪ゆ長き一刀を瑞降ハ挿ぐ。皂苞袋の単羽織を細く畳く帯ハ着夕陽を透んゆ高ゆゆ。白布の手拭を頭ハ巻ゆる端を額の上ハ巻第め朱緒の桐の下駄を穿ゝ云ゝ。その性若ゆ悪ゆ知ゆねど色白ゆく骨法鄙ゆゆ現丈五兵衛ハ比興一如く。犬塚信乃ハ似ゝ云ゝ小文吾ハ又ゝ云ゝ。ハ市川の使ゆ神輿洗の打撫ゝく。こちの里人そちの里人送ハ此二の傷ゆゆ。昨夕もけのゆ人橋渡しく召ゝ左ゝ面出一せどさゝく他人のゆゆ。

和主が分までも骨折て。女房も半治めくるとのいろせも果ず。冷笑ひそゝる骨を折まつらん。あるべきあまたども今途ぐ。仕げば敵もハ浅殘多り。市川人ハ二人まで。おのく稟る殘ハ車り。美ぞ等分ハ理をのこ〳〵遽りもいさせど引つ〳〵る和主と已ハ鰯鍋内證のこゝのゆゑ蓋そ〳〵。積香立ぬ樹もあく〳〵彼截判の先ゞ打房ハ女房の兄ハ怕とく知りても知らぬ自ハく受とくせ〳〵と世間の人ハのゝまてハ。こゞ一郷ハ簸債みく背負ゆく退ても路ハ〳〵死ても名折と生ての恥辱今時ゝ色を確執の種花をのこ〳〵ねば勇ゞ立ぬ思按決めく挨拶せと嗜り立れど此ても驟ぶを房ハそまゝハそゝの僻案甲乙つけく己ゞ打ものゝ〳〵せ。一夜一日ゝそども牙ぶ〳〵。そゝのさを達くあるとゝ送〳〵まゝハ花ゝ〳〵と。いのをゞ聽くゞ袖巻揚。そハのひ釈ハゝるとゝ秋侠骨の捐ゞ〳〵已ゝまゝゞのゝ〳〵ハ扱ゝくもゝゞゞゞハと侮らまゝ扱れゝる故事来歴のゝぐも知まゝ〳〵ゝゞゞのゝ

八幡の晴相撲。美事和主ハ負ゝまゝハ生涯土俵ハ足踏ゞゞと。ゝハ絶く個ゝ。ぬく〳〵とのゝ〳〵ゞ拭搔取く。剥ゝる月額疇と相親の異見を外ハく〳〵けゝまで。惜〳〵額髪剥落〳〵る青冷郎倘武士ゝゞ弓ゞ前を乗く。髮心入道せ〳〵ゝゝハ。ゝハ出ゝ房此度の確執相撲の日ゝゝ怖氣ゞつゞく。生ゝ〳〵里ハ肩入ゝゝ。潰ゝゝのゝゝゞ。釋如ゞも還俗せゞゝんゝ。夫婦ハ素〳〵ゝゝ合ゝゝの女房ゝゝゞ。阿男ゝハのゝゝ黒白判る覚期せゝゝ。鏡の鬼ゝゝ。爭ハゞゝゝく逆上せ〳〵欲。額髪まで剥落せ〳〵得度ハ見あげ〳〵男態形ゝゝゝ〳〵ハく。相撲の送恨ゝ拳。法ゝく返ゝゝゝゝゝ大人氣ゝ〳〵けゝハ五侍ハ支ゝゝゝハ。ゝゝ。宵一宿預けゝと和解く別去ゝ〳〵ゝゝゝ。物体つけく滑り逃ても脱ゝゝ今あで挨拶ゝゝゝ。敦圍ゝ後人蹴腸る裳ゝ。端折高く褄取ゝ。小丈五ハ今ゝゝハ。ゝゝゝゝゝ沈吟〳〵ゝゝゝゝ又ゝゝゝハ挨拶ゝゝゝ十分ハゝゝゝ

小文吾

延訓を受けて
小文吾
狼藉を思ふ
ふさ八

面をもこそ出さんと問へば取る袂を放ち斯くく起きと身を反さ刀を見りと抜く原臂推留くまを抜せど顔つくくとうち目成まそそこそ酒ゆ迷されく物ゆ狂ふ佞メ見れる。人を殺せば身を殺す親の歎かも子のそのもゆひ角ぎやと窘く取る臂を衝放せばいよく逼く下駄脱捨小文吾刀ゆ怯きく欲生醉扱ひ胸悪し。和郎ハ何時房八ゆ酒を盛て醉くる親の歎死も子のるも豫く期くる一生憑命とく勝負を決せよと声ふまを絞る汗と共ゆ玉散る如見刀の光まを又抜ふく詰よまをば小文吾も今ハ堪ねて共ゆ抜んとまを掛る鍔際見まを親の慈悲能く紙索ゆ禁らまく怒ともゆく欲め房八何とそいのぐい小文吾ハ一個の親あまをふくろ見命めて我を敵ゆゆ沼るくくこのゆ房八呆まを果く。ゆくまを哥くとうち笑ひ長刀を光らくても要緊の時ハ沼も抜きそその答のるもあまを見まを紙索ゆ留めくさだくり刀ゆ沼そくく俱ゆ巻の碎るまをで打あくく運を試んと来よ進めと諸肩推祖ぎ足踏鳴らくく立對へども小文吾ハ能らまく指の紙索のいと惜さゆ立在る侵ゆを又見頭を低く見ふまを房八ゆと見かく見ふく又眼然とうち笑ひ小文吾ゆとく立合ぶる相撲とちぐ〳〵く命ゆ勝負を巻もかそくく欲男態ハ大見うても乗つ見の撞銀甜瓜見みゆまを味ひまくかそまをの臆病者を人ゆしく打あゆバなのくゆゆ巻を穢さん是を咲へと足を蹈くく向臑撲地と房居ゆ蹴居く土足を肩ゆ踏被さり小文吾ハ片膝を衝さまをゆゆを抗てその足楚と受まをつ向上る面色朱を沃ゆ疾視逼てゆ堪くく見怒を忍べとゆまをる庭訓ゆ悖まを親ゆ不孝の子とまをん友ゆハ不信と疎まを見昨夕立さる誓言も紙索も断らゆ破くくこゆひゆ人せどかくらぬゆゆくくゆ人を見ゆ人をも身をも恨の涙。見せゆと汗ゆ分らくくゆ人を見の乱髪顔を背けくつゆゆ当下樹蔭ゆ躯ひく縛のゆを

覽るのあるを是則鎌倉の修驗觀得たり。滿面に笑ひながら見て出て禹歩し。ほとゝぎす近く立よりて扇を颯と推ひらきて房八を堅めあるが横めに見て背紙拊適愛さて心地よし。かくさてそいぬる日の相撲の恥を雪ぐさて一奇妙さて。と小鼻を張て誇ばる房八誘負て全體八幡の相撲にも負る筈でなるべけれ。俄頃に轉筋して思ひもよらぬ怪我ぐ此奴が力名あれ身も先途の腰愈に些躓き。と被りたる足をあちこち立居て觀得ゝあそるく顏さて歌をく西に歩迂巡頭をうち掉のあくそまたいらぬ。一口ものに煩りや燒んや躬敬に追ふべくも。和殿が十分たその仕さまぐ吾倩が百遍踢ようり。格別に痛つん尾を曳大田に打栄ゆ。あもこの侭ふうち措く例の酒肆ぐ一献酌んといまぐと誘ふべ房八に衣領を歛めく脱捨て下駄穿をゝ又小丈吾が傍と近く立よりて佶と疾視。大田と互でいまぐ消ぬぐよのいぶかるの色あるとも。それはれ今宵のあるくいん。

りたるゝをさんとたゞ寢刃あり。偖ておよそその折留守を使ふをいと憎さびに。期を推く先に立る觀得どうち見てゆふに市中の酒肆へとくそ伴ふ且ゝく。小丈吾に頭を擡げ。ものゝ又死仰さ見ひ倩く又見ども安らぬ公れ林搔。流を汗の麻衣あさまりさうぐ身にそとやう屈く小立あがりて裙に涙。沙を拂ふく禁う紀合し。さるにそも房八が日ごろに似げなる無法の挙動八幡の相撲を根にあちく身にも親をも忘れ人物の勝負に争ひの端緒と知れど名を好く誇を釣るに及ぶく世の人の情といひぐら原を他人の争ひを身に引受て妹夫とう。わや怨を結びて皆是吾倩の衝ちたる渠いたりに狂ゝとも打倒さんず難くもあらねど歌ふにあるぬに親の戒知ぬ妹へ兄が慈悲互に思ふ。互の車ひぐ身にそのうに人をぐ笑ひもまべ挾ゝもせん。相撲に負ぬるれにも只勝うに人馬鹿者の無法ぐ紀と嗟嘆く乱れ髪を

うえ拍つ。再び歩をいそぐ〜て遇と僅ふ三町ばかりを墓塚のほとりより捕ひの兵八九人簇々と走り出く。逃さじ〜遣じと捕籠う。呂ひけるを見るれば小文吾八敬禹に向ふ。厥邊ふ紅く花さ咲る。帕痒樹を小倉ふ。某犯せる罪あり。刀ふ入を認違く。捕る徳のひそと辞せるに〜〜陳もまびかをれ小文吾爭ふ。と声高安ふ呼びけく。野猪衆束せ〜一個の武士この地の荘官千鞆檀内を先ふ立て。文五兵衛を搦捕まく。駄兵ホる牽せる。物蔭よりを顕を出るを小文吾八佶と見てく。再び駭く親の縲絏ふ。おのもそもいふ。そもいつまど其処ふつ。件の武士八さもしそと間近く立對ひかをを小文吾。ゴを八是滸我殿の御内ゆく武者長を奉る新織帆太夫敦光る成識もや。癖者犬塚信乃とのふ。きのふ云云のるふ。御所を騒〜奉る。捕ひの兵犬飼見八と組撃〜く。芳流閣の屋の棟より河原面ふ墜れ〜。舩の中ふ滾落く。迹を暗〜落亡さを。

まるとふ。某追捕の嚴命を受る。昨夕通宵路次を急ぐく水ふ索め陸ふ攻へ鄕ふおの浦ふ来く。且く長途の疲労を休へ荘官檀内ふ相潭く。竊ふ信乃を索る程ふ件の舩を。葛浦の漠ふ漂ひ〜ける成辛〜くこれを獲う。その舩ふ〜。その人ふ。ふ信乃八見八を。水中ふ推投く陸ふ逃れ去を。房の欲ふ〜〜なるこの浦ふ潜居ることやあらんと。ひくび檀内ふ〜〜成沼さ〜く。市中村落ふ〜を探く。竊ふ穿鑿をてけるふ汝ぢ親古那屋文五兵衛ぢ宿所ふ。昨夕両個の旅客泊れり。その一個を今朝立去るぬ又一個八滞留せるを。此彼共ふ武士ふ〜と綽詳ふ。ゆえ〜〜〜

檀内を郷導て。こゝをみづから古那屋ゐ刻死家捜せんとく走る折檀内遥ゐ
汝を見て。彼ハ小文吾と呼るゝ。丈五兵衛が家子と告るゆゑ。これを
識ると見放さざるゆゑ。鞭兵ゐ下知して遮留め。綽のあくゐ及ぶを
親の縲紲を救んと。ゐ汝先ゐ進て件の旅客を搦捕せよ。異茂ゐ及
で親を本人身を縛の索ゑ被んぞ。あるゐ隨ゐ。こゝまでせ旅人の模様ハいか
ゆゑぞ。と威しゐ嫌しゐ説示せば檀内も亦進て出小文吾豫て知るゆゑ。
當領主千葉殿ハ御所の御方ゐをゐまゑ領主の下知ゐあるゆゑ。綽怒ゐ
ちこゝゐ後の外を脱とて。かゝるゐ御所ざるの鄰郡を騒せゑ。
ちのびゐ穿鑿して。信乃を搦めよと仰せてゆゑ。かれば一旦彼癖者を癖者と
知るゆゑ。宿貸するゐ。ゐまゑ自許せゆゑ。ゐ汝免さるゐ賞禄を
賜ん素と信乃を武藝拔群勇力無雙の佳人ゑ。ゐ式を詐計て搦

捕ゐ抜不意を撃て。刺殺して。その首捕て献らば。親の縲紲を釋のゆゑ。御
所の御感ゐ預らんその刃の名誉領主へ忠節和郎ハ奉法と相撲ゐく名残
近郷ゐ知るゆゑ。技も力もかゝる時播て。こゝ國益ゐ思按を決めて
ん報せよ。定ゐ大夫の外ゑ。名利ゐ喩を口功者。捕ゐの尾頭ゐ使ふべゐ。底心
とゝ。ゆゑ。小文吾ハ目ゐ耳ゑ見ゑ就きゆくゐ就き。胸ゑ苦して親のうへ
義を結びて友のゐ。浮沈存亡この時ゑ何とゐ。ゐ式輾て被て。壓て如死心地ハ
さゑゑ色ゐも出さず頭を擡仰の趣悉ゐ。ゐ式ゑ見ゑ。ゐ式ゑ。某ハきのゐ
祇園會ゐ。清遠ゐ推びて。昨夕もけふも宿所ゐ在て。ゐ式目今飯宅の中途
ゆく不慮ゐ。ゐん外と蒙て。親の縲紲ゐ驚くのゐ。ゐ式ゑ。ゐ式その旅客ハ武士ゐ。
百姓ゐ。ゐんゐまゑ。ゐ式もせゑ。ゐ式ゑ。ゐ式ゑ。ゐ式

る虚説ゆゑ昨夕泊し旅客ありし家捜をせらるゝぬる外ゆへせん落るき抜
と戸ふ低き檐藁屋も賤しきゆゑ城廓證据分明ゆゑ貧乏隠士家
の内を隈なく捜さるゝもよろし恥ゆゑ数なくねども一丈夫人ふ使者
といふれる名を惜めば歎しくもなれ餘あるゆゑ加旃その癖者を滞留
きやうまゝ武藝勇力捷きる大刀風ゆゑ鋭くゝさゝゝヨヌ勢をのそんも
捕逃さゞるのひゝゝ二十六計欺詐を若しす。ちん隊勢を遠離て某ふ任
しゆゑ何ぞも親のみるゝ。ゝゝ宿所ふ立入るゝ。その旅客ゝ在ゝ詐計く
捌捕ん縦その便を図ゝ。ゝ酒ゝ強く醉臥させ寝首を捕て献ゝとの幾ハ
いゝとあらく。當坐を脱る才子の辯舌説賺さるゝ、帆大夫ハ然ゝゝ
打頷ゝ汝ゞ意見説得く理あゝ。信乃ハ万夫無當の勇あゝ。ゝゝ隊兵ふ
砍ゝゝく此度も亦ゝ捕ゝもを吹く疵を求る過失ゝゝふゝゝ現後

難を脱ゝゝ。ゝゝゝ且く汝ふ任せんゝゝゝとのひゝく檀内を見ゝの
骨法圖ゝゝとゝふ取くさゝくと推開ゝ小丈吾ゝハ彼癖者犬塚信乃ゞ骨法
圖ゝゝゝ武士ゝ且百姓ゝゝその旅客の年紀全骨ゝゝゝの図ふ引
合し一毫も似ゝゝゝゝ詐計寄ゝ捌捕ゝゝゝ錯認悞ゝゝ人たゞゝゝ外
ゝ市中の出口江河の船場ハ土兵を借かく嚴重ふ守ゝゝゝゝゝゝゝ遅
遅ゝゝゝゝ今宵一夕を限ふせん明ゝゝ有ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と骨法圖を隊兵く遮与ふゝ小丈吾ゝ受ゝゝゝゝゝ巻て懐へ
ゝゝ入ゝく襟ゝ結ひ既ふかゝ命ゝ奉公を仕ゝ願ゝハ親の縲絏を
しく某ふ顔させゝゝとのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
否ゝゝ絶ゝ稱ゝゝ親をその子ふ子をその親ふ委ねざゝハ律令の本文汝ゝゝゝ
一穴ゝゝ貉ゝゝん欲ゝゝゝ乗ゝゝゝ癖者信乃を捌捕ゝゝゝゝゝ

帆大夫遠ホ
こんご
小文吾を
搦捕んとす
文五兵衛
小文吾

荘官たん内

西箇ふ一箇功あるまく文五兵衛ハ人保之親を救ふも罪なふもまぐく汝が心ふ
わるんそ残今願ふとろと叱懲せば小丈吾ハ忽地望を失ふく嘆息しつ
頭を低又いのよ〳〵もあるをけり。當下荘官檀内ハ帆大夫ふうち數ひもを
曛昏ふあるもくハ彼癖者ハ夜ふ紛まく逃亡るるのやあるとてろ小丈吾を
返さぬのひて出口の戍卒肝要あくんとのべ帆大夫後方を見ふを現日ハ海ふ
没んとあるり。小丈吾ハ且く放をもくうしつ義ふ偽あくハとも力も功を立て廿荘官
許まう〳〵出よとく邁といそぐく又丈五兵衛を牽さろ。檀内が宿所へとく。
衆皆齊一身を起せば小丈吾ハ阿とむるを心をまとど立ひて目送る子
よりと親をあるのいひてふいくを度見ふるるをあ暮ねとも心の闇る
迷ひろ。後へ牽る縛索未の歩中過く鶏ハ物ふ別まの悲を誰がう人告るタ
烏宿巣をさい〳〵引裂れ歎ふの杜欲願事をいろく心祇千早振神をを知らめ。

子ハ親の為ふ隠しハ親ハ子の為ふ隠しくいと直ふ道のあてをかくるさとあるさるさ
のあるひまさまるまべ追立うまるく跌く老の背影杖ふあるく呉い行の暖の薮ふ
隔らまを着こ見えまどあるふけを小丈吾ハ愀然と胷を拍くうち歎ふ六十ふ迫き
親の漂洩を釋と易く又難ふハ義の一字も亦重ふ故あり且く難苦を忍び見
るるかくもく救ざるんや父をけらく彼人ふも縛安らけく恙ふふ尋思もるとふ
組さうくとあるふ人相の鐘の声をう恒るふぬ胸ふ応く天うち仰ぎるるう女こ
くとうるく物をふのふう宿所のるもふのるう。あらふ躊躇とうるとみるうう諫く
端折。裾うう長ふ腕刀も繹突詰一二輕の家路をさ〳〵いそぐふも倘間諜者を
かく跟らうとあるのをせんとふべ四下ふ眼ふ配る心隙ふふ折るまべ夕の風の涼き
ゆも汗ふ喘ぐくかり来ふ檐下近くある隨ふとんまべ店前ハ過半簾ふ垂ふ龍て
紋蓼とうく裡面いと暗うう戸ふ閉ふとうるふ只一枚繰掛うる戸を開く進ふ入り。まべ燈火を

とひとりおもふ。そゞ伏庵漏（起げ）たる。燧盒火を鑽音も外に憚り。二三の行燈小幸ど移とりく。一箇ハ店前にまえ一箇ハ引提く子舎に赴くに現ハを。左ゝ右ゝ信乃只ひとり病臥こゝろハのふと驚たゝくまゝ。その中ゝを訊るに。信乃ハ中ゝ起ることゆゑ。その金瘡の曉ぐゝより。猛に腫疼る苦惱堪ゝたるに。又現ハ公業を求んとて潛く武藏なる。忘婆浦に赴たゝを。信乃ハ後に知るに。又文五兵衛。憂義に莊官許ゝ。ゝく出て。ゝを告るに。呼吸せらゝく。細とり小文吾ハ憂の中に又一層の憂をまして。こゝ苦しさ限りなき。親のゝハさらえ。房ハがゝのまでも。類るに便なけれど。ゝ慰めく。慮く火を起て。粥を烹復く勸るに。信乃ハその疼痛の此ゝ。こてゝこゝ。ゝめゝ。絶に著をゝ折ゝ。店前なる。簾を揭く。誰もそゝ。ゝを。ゝと。呼び。裡面に入ゝめゝ。是何人ぞ。其ハ次の卷に解分ると。知ん。

里見八犬傳第四輯卷之二終